第一章　渡辺プロダクションの誕生

私の場合、バンドのリズム・セクションの評価は、一緒にプレイしない限り、とやかく言えないの。とくにベース・プレイヤーがそうね。ベースって、建築でいえば土台みたいなもので、手抜きをされると建物が傾いてしまう。

晋さんのベースは、しっかりと建物を支えてくれる堅牢な土台でした。私がアドリブに熱中して、ふと自分の居所がわからなくなったときでも、晋さんのベースがちゃんと居所を教えてくれるんです。船の錨のように……。だから、私は安心してスウィングできた。

地味なプレイだけど、あのベースの良さは一緒にやった人じゃないと、ちょっとわからないでしょうね。自分は地味な役割に徹して、ほかのメンバーに存分なプレイをさせてくれた人、それが晋さんだった。

私がアメリカから五年ぶりに帰国したとき、渡辺プロダクションはもう大きくなっていて……。あっちでも渡辺プロの話、こっちでも渡辺プロの話。でも会ってみると、晋さんも美佐さんも少しも変っていなかった。晋さんのベースがそのまま渡辺プロダクションの土台となり、ビジネスという船の錨になっているんだと、理屈抜きに感じましたね。

秋吉敏子（ジャズ・ピアニスト、バンド・リーダー）談

〝戦後〟の青春

一九四二（昭和一七）年四月一八日の東京、名古屋に対する米軍機の空襲は、以後、四五年八月一五日の終戦日まで、四七都道府県、四〇〇の市区町村に規模を広げながら続行された。この間に投下された爆弾、焼夷弾は、アメリカ軍資料によれば約一六万トン。罹災者は一〇〇〇万人を超えたという。最後の止めを刺したのが広島、長崎に投下された二発の原子爆弾であった。

戦争の末期から敗戦直後にかけての日本人の生活を、鶴見俊輔（哲学者、評論家）は『戦後日本の大衆文化一九四五―一九八〇年』（岩波書店）のなかで、つぎのように表現している。

東京では私たちはすべての方角に地平線を見ることができました。焼け跡となったこの町には多くの人たちが穴居生活（防空壕）を続けていました。私たちの暮らしは先史人の暮らしに共通するところを持っていました。

「先史人」とは言い得て妙である。四六年一一月に永久平和の理想を謳った新憲法が公布されたけれど、日本人はなお一日一人当たり二合五勺（二七五グラム）の配給米でやりくりするという現実のなかに置かれていた。縄文人のほうがはるかに豊かな食生活を営んでいただろう。しかし、鶴見の言葉のなかには、風通しのよい焼け跡の空気も匂っている。

四七年、渡邊晋と河合聰一郎（元・サウンド・シティ相談役）は早稲田大学法学部の入試に合格したが、彼らの日々は空腹感との戦いだった。復員軍人や引き揚げ者など、労働力はあり余っており、学生はアルバイトを見つけるのも大変だった。早大近くの改明館と

いう下宿にいた晋は、「バンドなら食えるよ」という先輩塩崎達成（トロンボーン奏者）のアドバイスに従って、ギターをいじり出した。

しかし、練習だけでは腹の足しにならない。似たようなレベルの仲間を集め、早大ニューグリーン・ハワイアンズというバンドを発足させた。セミ・プロといえるのはスチール・ギターの湯沢弘だけだった、というからアマチュア・バンドである。その最初の仕事は河合がお膳立てをした。彼の実家は四国の坂出市にあり、そこの同級生が「平和館」という映画館経営者の息子だった。その平和館を借り切って手打ち興行をしようというのである。

河合がそこまで強気になったのは、早大軽音楽部のエース級ともいうべきサンヴァレーの出演許諾を得たからである。サンヴァレーは塩崎のほか、石黒寿和（トランペット）、与田輝雄（テナーサックス）、寺岡真三（ピアノ）らがメンバーで、プロの間でも注目されていた。ニュー・グリーン・ハワイアンズはその前座をつとめる。

四八年一月三日の公演日。そのサンヴァレーが当時の交通地獄で来演不能となった。ぎりぎりにスケジュールを組んでいたのが祟った。その点、晋たちはスケジュールなどないから、とっくに到着して、四国の正月を楽しんでいた。河合だけが顔面蒼白となった。

河合は親友の晋に善後策を相談した。「仲間に無駄足だったとはいえんな。われわれだって早大軽音楽部だ。オレたちだけでやろうじゃないか」と晋は言った。いったん肚を据えると、晋の行動は迅速だった。ハワイアンのスタンダード一〇曲くらいのレパートリーしかないバンドである。まず「早稲田大学復興資金募集」と手描きの看板をつくって、町の要所に立てた。演奏の腕前を大義名分でカバーしようとしたわけだ。さらに晋はアイデアを練った。坂出に帰省中の慶大生から学帽を借りてこい、という。晋たちは黒の学生服に早大の角帽という一張羅だった。三人のメンバーに慶応の帽子をかぶらせて、早慶応援歌のカケ合いを入れた。

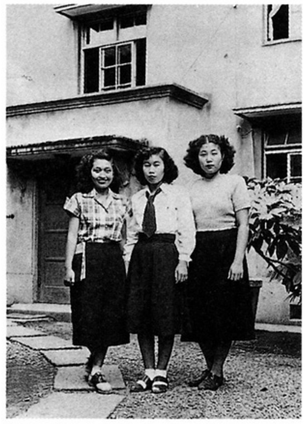
それでも、まだ時間が余る。晋は河合を同行して、金時会という地元の子女に日本舞踊を教えているグループを訪ねた。母校復興の趣旨を訴えて、一緒に出演してくれと要請してくれる。後年のしなやかな気転と、なにがあっても最後まで粘り抜く晋の片鱗がすでにた。時間稼ぎにもなるし、ハワイアンに興味がなくても、娘の舞台を見に両親が会場に垣間見えた。晋はベースにまわり、まったく素人の河合にもウクレレを持たせた。「弾く格好をして、舞台に立ってればいいんだよ」。こうして晋は、演出まで手掛けたのである。

「満員の客席のあちらこちらからオヒネリまで飛んでくるほどの大成功だった。これに味をしめて、追加公演ということになった。多度津、高松、そしてまた坂出と、調子にのって一日おきのハード・スケジュールだ」と、のちに河合は回想する。やがてベース・プレイヤーとして人気者になり、傑出したプロデューサーへ大成してゆく渡邊晋のデビューであった。

その三カ月後、四八年四月のはじめに、曲直瀬美佐は日本女子大学英文科に入学した。疎開先の仙台・宮城女学院から十数年ぶりに出た日本女子大学の合格者とあって、おおいに期待されて上京、しつけの厳しいことで有名な雑司が谷の泉山寮に寄宿した。

堅苦しい寮生活のなかで、美佐にとってなによりの楽しみはラジオから流れてくるジャズだった。とくにNHK第二放送を転用した、進駐軍放送WVTR（AFRSとも呼ばれ、のちにFENとなる）が耳に心地よかった。グレン・ミラーの『ムーンライト・セレナーデ』、アーティ・ショーの『スター・ダスト』などの甘美なサウンドと、英語の流麗なアナウンスがミックスして、いっそう陶酔感を深めた。ビング・クロスビーやフランク・シナトラの唄声は、自分ひとりに囁きかけてくるようだった。焼け残ったレコード店にも、

早大時代の渡邊晋（右端）


日本女子大の学友と（左端）

ようやく洋楽のレコードが出回りはじめた。

仙台で進駐軍関係の芸能社を経営している両親からは、月に一万円近くの仕送りがあった。晋に比べると恵まれた学生生活だった。彼女が二年生に進級して間もなくの五月、飲食営業臨時規制法（通称・飲食店再開法）が国会で成立、即日公布された。四三年以来、営業を停止されていたビアホールも、四六年六月から復活していた。銀座が本来の賑わいを取り戻してくる。

その頃から、美佐の〝銀ブラ〟が日課のようになった。授業が終わると、友人と連れ立って銀座に出る。この街に、美佐の好きなジャズはよく似合った。晋がプレイヤーとしてジャズにのめり込んでいるとき、美佐はファンとしてジャズを楽しんでいた。

美佐がとくに好んだ銀座の店は、アメリカン・スタイルの「チョコレート・ショップ」だった。大きなカウンターがしつらえてあり、従来の喫茶店にはないサロン的感覚をかもし出していた。同じ建物の上にはナイトクラブ「銀馬車」があり、江利チエミ、シックス・レモンズがレギュラーで出演していた。チョコレート・ショップは銀馬車に出演する人、銀馬車にジャズを聴きにくる人の出入りが多く、やがてジャズメンやジャズ・ファンの溜まり場となった。

ジャズメンの間で曲直瀬の娘として知られている美佐に、慶応の学生バンドのメンバーは、「いいアルバイト先はありませんか」と相談するようになる。当時、学生バンドのアルバイト先といえば進駐軍のキャンプが多く、美佐は趣味と実益を兼ね、学生バンドの通訳として王子キャンプのゲートをくぐった。

しかし、通訳だけでは物足りない。バンドのスケジュールを管理し、自分で仕事を決めてゆくようになる。きわめて自然に通訳からマネージャーへと踏み出していた。ほかの学生バンドも美佐を頼ってくる。四年生になった頃には、そんなバンドを四つも抱えていた。

戦後の銀座大通り
（提供／内田晃一）

泉山寮にはいられなくなり、下落合に下宿する。美佐の豊富な手駒をみて、今度は王子キャンプのほうから、彼女にクラブのエンターテインメント全般のプログラムを一任してきた。

美佐が日本女子大学を終えた五一年は、民間ラジオ放送が開始された年であり、日本でLPが発売された年でもある。そして、九月八日には連合諸国と平和条約に調印し、翌年の独立を待っているときであった。

晋の粘り強さと、美佐の華麗さと。鶴見のいう〝先史時代〟をくぐり抜けてきた、対蹠的な青春の姿がここにはある。それがジャズの海で遭遇し、渡辺プロダクションという大きな潮流を形成するのだが、しばらく巨視的に戦後の日本ジャズを見ておく必要がある。

戦後ジャズの推移

戦前、すでにジャズ歌手として名を成していた水島早苗は、戦争末期を軍需工場の慰問で過ごしていた。終戦後も残余のスケジュールを消化し、東京に向かったのは九月中旬である。その途中、彼女は高崎駅でGIに声をかけられた。「きみはジャズを歌えるか？」。

バンドのメンバーと一緒だったから、GIにも一眼でそれとわかったのだろう。「イエス」と答えると、その場で彼女らはトラックに乗せられ、米軍キャンプに向かった。このとき水島は、『マイ・ブルー・ヘヴン』を歌った、という。大勢の米兵たちを前にしては、戦時のナンセンスな〝敵性音楽・ジャズ〟の禁止（情報局通達）など、どこかに吹き飛んでしまった。

これは、戦後ジャズの再開事情を物語るきわめて象徴的なひとコマといえる。ジャズ復活を直接に促したのは連合国軍、とくにその主力となったアメリカ進駐軍の需要だった。

『日本のジャズ史』（スイングジャーナル社）の著者内田晃一は、一九五一（昭和二六）年からバイブ奏者として活躍、五四年から六七年まではシックス・ジョーズに籍を置いていた。従って同書の戦後編は、ジャズメンによる同時代史といった趣きもある。

内田によると、日本人ジャズメンが「キャンプ回り」をしていた米軍施設は、東京・横浜に限っても八三カ所以上。通常のキャンプには、将校用のオフィサーズ・クラブ、下士官用のNCOクラブ、兵隊用のEMクラブ、空兵用のエアメンズ・クラブがあり、大規模な基地には軍属用のシビリアン・クラブ、サービス・クラブも置かれていた、という。横須賀海軍基地には七つのクラブがあり、連日、百数十名のジャズメンが出演したとある。これに東京宝塚劇場や大阪北野劇場のような接収した劇場が加わる。いかに膨大な需要だったかがわかる。

それにしても、七つの施設に百数十名のジャズメンとは、人数が多すぎるように思われるが、これはメインの需要が、ダンス・バンドのフル編成オーケストラだったせいだろう。戦後に復活したフル・バンドの最初は、松本伸のニュー・パシフィック・バンド。戦中は対敵謀略ジャズ放送にかかわっていたメンバーが中心で、戦後、NHKでジャズを初放送したバンドである。このあたり、軍需工場慰問の足でキャンプ慰問にまわった水島のケースと似ている。ちなみに四サックス、三トランペット、三トロンボーンに、ピアノ、ドラムス、ギター、ベース、ボーカルの一五名編成だった。

このダンス・バンド全盛期は戦争直後から五三年頃までつづき、主なバンドは約二〇を数える。ニュー・パシフィックのほかに渡辺弘とスターダスターズ、多忠修とゲイ・

米軍キャンプ立川シビリアン・クラブ
（提供／内田晃一）

スターズ、ブルー・コーツ・オーケストラ、紙恭輔のアーニーパイル・オーケストラなどがある。

とにかく需要が圧倒的に供給を上回っていたから、バンドの出演料は急騰した。その対策としてGHQ（連合軍総司令部）は、進駐軍関係の処理を行っていた外務省の下部機関「終戦連絡中央事務局」に、ライセンス発行と、ジャズメンの実力に応じた適正な出演料を定めるよう要求した。四七年七月、その格付け審査委員会による最初のオーディションが実施された。審査員は評論家の野川香文を筆頭に、戦前から有名なミュージシャンが名を連ねた。東京を皮切りに全国主要都市にも出張し、同年中に二〇〇バンドが審査（課題曲を演奏する方式）を受けた、という。

このときの格付けと演奏料金は、内田が別表のようにまとめている。「S・A」のSはスペシャルの略だが、最初の一時間だけで三八〇円。内輪にみて一日一時間、日曜日を休んだとしても月収は九八八〇円になる。四八年一月の公務員の初任給が二三〇〇円とあるから、いかに優遇されていたかがわかる。フルに稼働したら総理大臣の月給二万五〇〇〇円を抜くことも可能だったろう。彼らの職場にはコカ・コーラや、肉、野菜を山のように盛り上げたサンドイッチなどが溢れ、勤務外兵士たちの余暇をエンジョイする陽気な情景がみられた。ライフ・スタイルとしてのアメリカン・ドリームを最初に実感した日本人はジャズメンであった。

格付けの演奏料金は、各キャンプの担当者に通達され、出演したプレイヤーたちは、仕事が終わると米軍のPD（小切手）を受け取る。PDを現金化するのは終戦連絡中央事務局である。この組織は四九年から特別調達庁に改変されるが、格付け審査制度は五二年三月で廃止される。これはマネージャーの手腕によって、出演料に格差が生じてくるということでもあった。

格付け審査委員会が決めた演奏料金（昭和22年発足時＝1人あたり）

ランク＼料金	最初の1時間	＋1時間ごとに
S・A	380円	110円
S・B	320円	90円
A	290円	90円
B	180円	90円
C	150円	90円
D	110円	90円

（出典／内田晃一著『日本のジャズ史』）

米軍キャンプで演奏するシックス・ジョーズ
（提供／内田晃一）

講和条約の発効とともに、「キャンプ回り」の性格が変化した。ミュージシャンとキャンプの中間に介在する芸能社が出演交渉を代行したり、ＰＤ現金化の便宜を図ったりして、格付け制度を次第に空洞化してゆく。いっぽうで、ジャズ・ブームの様相が一変した。

四七年頃から、進駐軍部隊の入れ替えがはじまった。戦争から引き続いて日本に進駐した兵士たちを本国に帰休させ、新規の兵士を交替要員にした。この兵隊たちは本国で流行っているバップを日本人バンドに要求した。占領軍向け放送のＷＶＴＲはバップをさかんに流していたが、戦前派ジャズメンは乗り切れなかった。内田は南里文雄とホット・ペッパーズのバップ演奏を聴いて、「リフはたしかにバップ仕立てだが、ソロになるとディキシー風」と評している。

こうしてバップ熱は、日本のジャズをダンス・バンドからモダン・コンボへと急旋回させた。馬渡誠一らのＣＢナインが先べんとなった。ここから清水潤（ドラムス）、寺岡真三（ピアノ）、松本英彦（テナー・サックス）、安藤八郎（バイブ）らが頭角を現し、グラマシー・シックス、レッド・ハット・ボーイズに展開してゆく。モダン・コンボは多くのスター的ジャズ・プレイヤーを生んだ。そこには戦後派がずらりと顔を揃えていた。このスターたちを擁して、空前のジャズ・ブームが開幕するのだ。渡邊晋、曲直瀬美佐の登場は目前に迫っているが、その前にもう少し当時の状況を整理しておきたい。

ジャズ・ブームの時代

戦後のビッグ・バンド・ジャズを中心とするブームには、大きくわけて二つの支持層があったようである。ひとつは大正デモクラシーの残光を浴びて育った人たちの、甦った郷愁であり、ひとつは戦中・戦後世代の解放感と、アメリカニズムに対する憧憬だった。当時の用語では、ジャズとは舶来音楽の総称であり、ＮＨＫふうに言うなら軽音楽である。

モダン・コンボによるジャズは、その認識を一挙に覆した。フリーな精神に支えられた、フリーなスタイルとフリーなプレイこそがジャズの神髄だ、とされた。その点でコンボ・ジャズは若い世代の価値観と一致した。一九五二（昭和二七）年から翌年にかけて、空前のジャズ・ブームが吹き荒れた背景には、キャンプのゲートをくぐり出て、日本人相手のステージに立ったコンボ・バンドと、胸中のもやもやした鬱屈を発散したい若者との、劇的な遭遇があった。それはもはや、ダンスなどを介在させず、バンドと聴衆が直接に向かい合うジャズ・コンサートになっていた。

内田は、このジャズコン・ブームの最右翼に位置したバンドとして、渡邊晋とシックス・ジョーズ、与田輝雄とシックス・レモンズ、ジョージ川口とビッグ・フォーの三つを挙げている。

ニュー・グリーン・ハワイアンズの初公演が四七年一月。シックス・ジョーズが世に出たのは五一年一〇月である。その四年間の晋の足跡を駆け足で追うと、下宿の改明館（早稲田）にいた戦前派ジャズ・ピアニストの菊池滋弥に師事しながら、ハワイアンのアルバイト・バンドを組んでいた時期を経て、四九年にキャンプ回りのコンボを結成する。与田みつまさ（ピアノ）、山崎貞次（アルト・サックス）、寺田昭三（ドラムス）らで、特別調達庁のランク査定はＢだったという。翌年四月、品川のキャンプ「バタフライ・クラブ」に出演することになり、晋はメンバーを一新した。早大の後輩になる中村八大（ピアノ）、宮腰巴夫（アルト・サックス）、染谷一孝（テナー・サックス）、寺田昭三（ドラムス）、笠原さよ子（ボーカル）で、バンド名もファイブ・ジョーズ&ア・ジェー

シックス・ジョーズ、オリジナルメンバー（1955年頃）

ンとなる。その後、安藤八郎（バイブ）、坪井功（ギター）、南広（ドラムス）、宮川協三（ギター）、井川幸長（テナー・サックス）、渡辺辰郎（アルト・サックス）の交代や加入があった。

五一年一〇月、渡邊晋（ベース）、安藤八郎（バイブ）、宮川協三（ギター）、南広（ドラムス）、中村八大（ピアノ）、そして松本英彦（テナー・サックス）による「シックス・ジョーズ」が発足した。リーダーは依然として晋。坂出市の処女公演で示した統率力は、いよいよ磨きがかけられていた。晋は新進気鋭のベスト・メンバーを組み、バンドのテーマ曲はジョージ・シアリングの名演で人気のあった『セプテンバー・イン・ザ・レイン』と決めた。都会的センスに満ちたクール・ジャズのパイオニアを目指した。特別調達庁のランク査定はスペシャルB。

シックス・ジョーズが横浜の「ザンジバル」と契約した五一年一〇月、内田は桜木町のザンジバルに出掛けた。暗闇のなかで晋のベースがソ・ファ・ミ・レと響き、照明がはいるとメンバーがあの都会的哀愁に満ちたモチーフを奏でる。中村八大の編曲は抑制を効かせた知的雰囲気の濃いもので、クラシック・ファンまで静かな興奮にまき込んだ。以後、内田はシックス・ジョーズ・フリークとなり、やがてメンバーの一員になるのである。

五二年一月から銀座のクラブ「ハト」（新橋千疋屋の上階）に出演し、読売ホールの「スィング・コンサート」で他のバンドと競演してから、シックス・ジョーズは日本人聴衆の間にも一挙に知名度を高めた。翌五三年、「スイング・ジャーナル」誌人気投票の「コンボ部門」で第一位。その後、松本、中村にかわって吉本栄（テナー・サックス）とレニー・パブロ（ハワイ出身でジュリアード音楽院卒の米兵ピアニスト）が加入し、レニー帰国後は山崎唯を起用する。さらに南、吉本が退団したあとは、松本を復帰させ、

「ザンジバル」のシックス・ジョーズ
（提供／内田晃一）

吉野公彦を補充した。

南と吉本の脱退はバートランド・ファイブ結成のためだったが、このことが渡辺プロ誕生に一役を買う。それについては次節で後述する。

早大で晋の先輩にあたる与田輝雄が、秋吉敏子（ピアノ）、フランキー堺（ドラムス）、渡辺辰郎（アルト・サックス）、松本文男（トランペット）、平野快次（ベース）と語らって「シックス・レモンズ」を結成したのも五一年一〇月だった。ダンス・バンドやステージ・ショーなど、守備範囲の広さを狙ったらしいと、内田は観察している。与田は五四年の「シックス・レモンズ・オールスターズ」を経て、五五年、松宮庄一郎（ギター）、松田孝義（ベース）らと「シックス・レモンズ」を再編成して、京橋の「クラブ・リッツ」に出演中、晋と不思議な遭遇をすることになる。

「ビッグ・フォー」はシックス・ジョーズを退いた松本英彦、中村八大に、ジョージ川口（ドラムス）、小野満（ベース）が集合してつくったスター・プレイヤーのトップ・バンド。五三年五月の結成で、日本ジャズ史上、空前の人気バンドとなった。中堅プレイヤーの月当たりのギャラが二万五〇〇〇円だった頃、彼らは均等に分割して一人月に四〇万円を手にしていた、という。しかし、バンドの寿命は長くなかった。麻薬によるダウンやメンバーの反目があり、ちょうど一年後に小野が退団し、第一次ビッグ・フォーは呆気なく解体してしまう。松本が「シックス・ジョーズ」に復帰したときは、月給二〇万円だったと、これは松本自身の回想である。

以上の人気コンボご三家に代表されるジャズ・コンサートのブームは、五四年から次第に翳りが兆してきて、翌年には最盛期の熱気は、まったく醒めきってしまう。その最盛期後半に、渡辺プロの胎動がはじまるのである。

戦後ジャズ・ビジネスから出たプロダクション

渡邊晋とシックス・ジョーズ、与田輝雄とシックス・レモンズ、ジョージ川口とビッグ・フォーの消長を簡単に一瞥しただけで、人気バンド間のスター・プレイヤーの引き抜き合戦がいかに熾烈であったかがわかるだろう。メンバー強化のための引き抜きを考えたり、防御策を講じたりするのが、バンド・リーダーの手腕とされた。

大世帯のダンス・バンド時代から、バンド・リーダーはまずバンド運営の責任者であった。晋もシックス・ジョーズ発足のとき、音楽面は主として中村八大に委嘱している。八大は、改明館に巣食っていた早大軽音楽グループのひとり中村二大の弟で、小学生の頃からピアノを弾いていた。クラシック一筋に勉強していたが、たまたま宝塚歌劇を見にいって魅了され、レビュー通いがはじまった。ポピュラー音楽に身近な安らぎをおぼえ、ジャズに開眼したのだった。

二大が八大を晋に紹介したことから、シックス・ジョーズがスタートするのだが、当時、コンサートが開幕する直前の二人の会話を、八大は記憶していた。

八大「晋さん、あの曲のあの音とこの音は間違えないで。この曲はこう弾いてください」

晋「八ちゃん、ほらほら、笑顔を忘れないで。客席を見て、にっこりして」

運営責任者と音楽責任者の立場の違いが、鮮明に浮き上がってくる会話である。

八大は「ずうっとあとになって、私も客席ににこにこできるようになったが、笑顔を客席に向けるということも、なかなか難しいものだった。晋さんは、観客に心地良い印象を与えることが、なによりも大切だとの考えだったのだろう」と書いている（『渡邊晋追想録』以下、追想録と略）。

もともと豪快なプレーで人気のあった松本英彦にも、晋は「もっとブローしなよ」とけしかけた。当時では珍しい完全アレンジメントによって高い音楽レベルを確保した上で、晋はなおメンバーたちに、聴衆へのサービスを要求したのである。

基地やクラブでミュージシャン相手の契約を取りまとめる支配人たちは、音楽的な質よりも、聴衆の反応を判断の基準にする。そして、バンド・リーダーはよりよい契約をかち取らねばならない。晋はバンド・リーダーとして、経営の機微に触れ、その際立った手腕をバンド仲間に認められるようになった。

通時的にいえば、ここで渡邊晋と曲直瀬美佐との出逢いについて語るのが順序だが、それは次節で稿を改めたい。

ただ、ここでは中村兄弟のつぎの回想だけを引いておきたい。兄の二大は、「八大と晋を会わせたのがシックス・ジョーズの始まりで、品川のオフィサーズクラブに出演し、曲直瀬美佐さんとの出会いがあり、メンバーの充実、ジャズ・コンサートへのデビューと、目ざましい進展を見せ、人気投票上位に名を連ねるまでになった」と言い、八大は「シックス・ジョーズは、テナー・サックスの第一人者松本英彦氏の加入によって、トップクラスのコンボに成長した。松本氏は、当時では破格の高級取りだったが、晋さんは苦もなく彼の入団を決めた。マネージャーの美佐さんが加わってからのシックス・ジョーズは日の出の勢いで、毎日がコンサート出演の日々になっていった」（『追想録』）と証言している。

この引用から、確認できることが三点ある。第一に、シックス・ジョーズが渡邊晋、中村八大、松本英彦を中心に、トップ・バンド（スペシャルA）の座に上りつめたこと。

中村八大氏

シックス・ジョーズ初のユニフォーム姿

第二に、バンド・リーダーとしての才腕を示していた晋が、ビジネスをより充実させるため、曲直瀬美佐というマネージャーを必要としたこと。第三に、晋と美佐が揃ったことによって、シックス・ジョーズの運営が、渡辺プロダクションのいわば助走、もしくは学校となったこと、である。

一九五四（昭和二九）年、シックス・ジョーズからテナー・サックスの吉本栄とドラムスの南広が脱退した。彼らはバードランド・ファイブというバンドを結成したが、地方公演の移動中に熊谷で交通事故に遭い、全員が病院に担ぎ込まれた。バンドをつくった直後の事故である。キープしている金などなかった。

バンド仲間の面倒見のいいことで定評のあった晋は、彼らの脱退の行きがかりを忘れて、知り合いのミュージシャンたちに奉賀帳を回した。だが、それだけでは入院費を賄えない。このとき、バードランド・ファイブの窮状を察した山田通男というマネージャーが、同様に奉賀帳を回していた。ミュージシャンとマネージャーとでは、奉賀帳を回す対象が自ら違ってくる。そうして集めた見舞金を、晋と山田は揃って熊谷の入院先に届けた。

山田通男（現・山田プロダクション代表取締役）は、戦後、予科練から古川ロッパ一座の脚本部を経て、立川米軍キャンプの通訳になった。米兵からも、ここに出入りする日本人ミュージシャンからもダンと通称された。そのうち山田のジャズ好きが高じて、やがてマネージャーになる。

駐留米軍のクラブから、ジャズ関係のマネージャーに転進した人としては、ほかに王子キャンプのスケジュールを掌握していた美佐、入間ジョンソン基地の永島達司（現・大洋音楽出版社社長）、第一ホテルの太田耕二（現・東和商会社長）がいる。

いっぽう、個人ではなく組織として、基地とジャズメンの間に介在した芸能社があった。日本交通公社芸能部、日本演芸社、東宝芸能社、花柳芸能社（松竹系）などが、東京を中心として活躍していた。占領下における既成企業のサイド・ビジネスだったか、とみえる。

地方にゆくと、通訳兼芸能社の形態が多くなる。仙台の米軍基地を対象にした曲直瀬正雄・花子夫妻のオリエンタル芸能社がよく知られている。

経営感覚のあるバンド・リーダー群、基地からの転進組、そして資本をバックにした芸能社。大別してこの三つが、ジャズを中心とする日本のショー・ビジネスを動かしていたのである。

当時、米軍で使われていた楽譜集
（提供／和田誠）

渡邊晋と曲直瀬美佐

一九五四（昭和二九）年に、晋と山田通男がバードランド・ファイブの入院見舞いに行った帰り道、晋はぽつりと「これからは組織の時代だな」と言った。山田もつられて頷いた。晋がこのとき語りたかったのは、バンド・リーダーや、通訳マネージャーの手腕だけでは、もう限界のある時代にきたということだったろう。シックス・ジョーズのレパートリーに『ローカル八〇二ブルース』がある。これはニューヨークのミュージシャン・ユニオンが所在した場所にちなんだものだから、そこからの連想が働いたのかもしれない。四六年の金融緊急措置（いわゆる新円切り換え）を機に誕生した芸能社は、五三年の朝鮮戦争休戦を受けて、大手は撤退をはじめていた。

つまり、晋は前記した第一のタイプと第二のタイプをミックスした、もっとプロフェッショナルな経営母体が必要だ、と説いたのである。現に駐留軍は、五四年に各地施設の接収解除を発表し、翌年から実施に移るとしていた。もちろん五二年のサンフランシ

スコ平和条約と日米安保条約の発効が前提にあったことは言うまでもない。日本は被占領国から独立国になった。通訳マネージャーの山田にとっては、コネのきく職場が減少してゆくことでもあった。

それでなくても、たったいま不慮の事故にあったバンド仲間の姿をみてきたばかりである。多くのジャズメンたちはわが世の春を謳歌し、その春が過ぎつつあることを知ろうとしなかった。あるいは知っていても、それと認めるのを躊躇していたのかもしれない。彼らのなかには過去の厚遇に酔って、通常の金銭感覚を失っているものも少なくなかった。晋は事態をクールに観察し、美佐と新しい組織の必要性を語り合い、その上で山田に話を持ちかけたのである。

この年のクリスマスの夜、晋と山田は徹夜で新しい「組織」の実現について語り合った。窓辺が白む頃には、二人の夢は一致していた。

「じゃ、最後は会社の名前だな」と、晋が言った。

「渡辺プロでいいじゃないか。社長は晋さん、あなただ。オレは専務になる」と、山田は答えた。

晋が社長、山田が専務。ということは、曲直瀬美佐が副社長になるということだった。それは動かしようのない前提として、山田も認めていた。

ここで話は、渡邊晋と曲直瀬美佐の出逢いに移る。その前に、両家の簡単な家族関係に触れておきたい。

渡邊晋は一七年三月二日、渡邊泰（ゆたか）（一八九五―一九五九）、サキ（一九〇二―一九九一）夫婦の次男として東京・北区の滝野川に生まれた。渡邊家は九州福岡・黒田藩に仕えた高禄の武家で、現在も福岡市内を走る渡辺通りは渡邊家に由来するという。明治維新後、

幼少時代の晋

渡邊家両親の結婚写真

その一部の土地家屋を売却して、第十七銀行（現・福岡銀行）の株を取得した。泰は九人兄弟の末っ子だったが、上の兄たちは、すべて東大を出てから、三井などの諸銀行に入社している。

泰だけ慶応に進んだ。予科をトップの成績で出たとき、兄たちは経済学部にゆけと助言したが、泰は法科を選択した。各任地を転々とする銀行マンの暮らしは、気が乗らなかったらしい。しかし、慶応を卒業した二〇（大正九）年は大学生にとって就職難の時代。志をまげて日銀に就職した。その二年後、博多の旧家（蝋問屋）から原田サキを娶った。サキの実父・原田徳次郎は福日新聞（現・西日本新聞社）の副社長をつとめ、併せて電通の社外重役でもあった。

日銀に入った泰は、案じた通り転勤が相ついだ。晋の小学校時代だけでも東京、門司、松本と移り住み、とくに松本での日々は晋の脳裡に〝信州〟の原風景を灼きつける。再び東京に帰ったとき、大田区洗足池の近くに自宅を建てた。家族はここに落ち着いたが、泰は北支開発の中核となる蒙疆銀行の設立を命ぜられ、単身赴任する。副頭取として敗戦後の残務処理を終え、四六年に帰国すると、洗足池畔の自宅はすでに戦火に焼かれ、自身は北支で現地の米国系、英国系銀行を接収した責めを問われ、戦犯として公職追放の憂き目に遭った。家族を疎開先の大分県別府に追い、久しぶりに一家団欒のときを持ったが、激職の疲れが出たのか、病に伏せることが多くなり、ついに日銀には復帰しなかった。晩年は、朝鮮銀行から帰国してきた友人と正金相互銀行を設立し、その役員となる。

子供たちに親の仕事はなかなかみえない。晋たちは趣味人としての父をとくに強く記憶している。戦前の転々とする任地で、ゴルフを楽しみ、弓を引き、テニスに汗をかき、玉突きに興ずる父の姿を思い出した。また、部下を社宅に呼んでは麻雀やカルタに時を過ごし、ひとりのときは俳句を詠んだり、画筆を握ったりした。その趣味人としての風

渡邊家の家族（晋は前列左端）

韻は、三人の子につけた名前からもわかる。長男に剛（現・岩原観光社長）、次男に晋（しん）、三男に恭（若くして夭折）と命名し、自分の名前「泰」も、「ゆたか」を「たい」と自称した。いずれも音読みで十画の漢字一文字。「オレの道楽だな」と笑っていた。

母親のサキは、旧家の躾をそのまま持ち込んだ。父親と他の家族とでは食膳が違った。子供には小遣いを一銭も持たせない。そんなきびしい母からみても、晋はまったく手のかからない、優しい子供だったという。三度かわった小学校（第二延山、清美、源地）でも、立正中学でもすぐ親友ができた。早生まれで上背もなかったから、「坊や、坊や」と呼ばれていた。早大の軽音楽部には晋のほかに、渡辺勇之助というテナー・サックスの仲間がいた。まぎらわしいので「ナベシン」「サクナベ」と呼んで区別したが、音楽にかかわりのない学生たちは、やはり「坊や」と言った。

戦前の洗足池では水泳ができた。立正中学（旧制・品川区大崎谷山が丘）に入ってからは転校することもなく、水泳部と弓道部でリーダーをつとめた。小遣いを持たされないから、友だち付き合いは家でやるようになる。放課後に大勢の友人を引き連れて帰ってくる。そのうち、空襲で焼け出された友人を連れてきた。自分たちが焼け出されるまでの一カ月、その友人の世話をみた。

立正中学は総本山身延山につながる日蓮宗の教育機関として創立され、二五（大正一四）年に現在の校名に改称した。由来を遡ると一五八〇（天正八）年の飯高檀林の創設に至る。三八年に文部省中学校令による認可が下り、晋の入学はその翌年のことである。伝統校でもあり新設校でもあるという二重の雰囲気のなかで育った。教育のモットーは「行学二道」「異体同心」。当時、この教えを説く教頭・水野正遠（しょうおん）の雄弁は、理解のおよばない生徒たちをも思わず泣かせるほどの名調子だった。

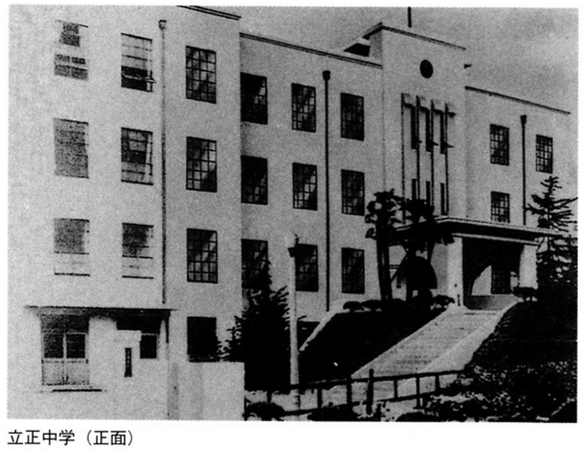
同期には声楽家の坂本博（ひろし）士、後輩にイラストレーターの山藤章二らがいたという。この学校は入学時のオリエンテーションとして、四月一日から二泊三日で身延山山上の親思閣に参籠する。渡辺プロが新入社員の参禅を実施した原型は、このときの晋の体験にあるだろう。「まず型（形）から入っていこう」。晋の特徴的な発想法は、この時代に形成されたのではないか。

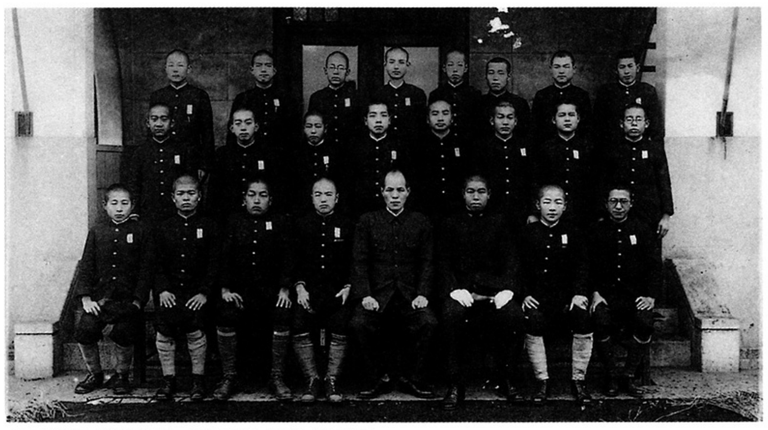
四四年、晋は疎開先から単身上京、早大専門部法律科に入学した。学生下宿の改明館で終戦を迎える。

曲直瀬美佐は二八年九月二五日、曲直瀬正雄（一九〇四―一九九二）、花子（一九〇〇―一九七四）夫妻の長女として横浜に生まれた。すぐ下に四人の妹、そして二人の弟がいる。家祖は日本医学に大きな足跡を残した初代曲直瀬道三（どうさん）（一五〇七―一五九四）である。室町末期から安土桃山時代にかけて活躍し、足利一三代将軍義輝をはじめ、毛利元就、織田信長らの診事投薬に当たった。六〇冊におよぶ著書のうち、『啓迪集』は正親町帝の天覧に供された。

没後、後陽成帝から正二位法印を贈られた道三も、後継者の点ではあまり恵まれなかった。妻との間に一男三女をなしたが、長男守貞は男子を得ずに他界した。しかし、姉の子の東井玄朔（げんさく）に才があり、これに守貞の娘を嫁がせて、二代曲直瀬道三を名乗らせる。二代目はやがて江戸に出て、徳川秀忠から下された屋敷の近くが道三堀・道三橋（現・常盤橋）と呼ばれる。

初代の門人は一千余人といわれるが、なかで抜きん出ていたのが岡野井正純（しょうじゅん）である。初代道三は守貞の次女と正純を結婚させ、曲直瀬姓を名乗らせる。亨徳院系曲直瀬といい、京都に住んだ。その亨徳院系曲直瀬の第一二代が養嗣の道策で、妻のみどり子とともに勤王の志が篤かった。家産を傾けて勤王同志の援助をしたが、一八六七（慶応三）


立正中学（正面）


クラス写真（立正中学・前列右から二人目が晋）

年五月、新選組の手によって暗殺された。みどり子は夫を十念寺に葬ってから剃髪し、一男二女を女手ひとつで育てた。しかし、長男・盛明は京都医大を卒業して間もなく、二二歳で早世し、長女・行義枝（ゆきえ）（美佐の祖母）は東京・九段教会の山鹿旗之進牧師に、次女・蔦尾は京都の商人堀又三郎にそれぞれ嫁して、曲直瀬の家名は一時途絶した。山鹿はこれを惜しみ、次男・正雄（青山学院卒）に曲直瀬姓を継がせる。曲直瀬の歴史は男嫡に恵まれなかった。

ところで、美佐の祖父になる山鹿旗之進は、山鹿素行の流れをひく。素行・山鹿高祐（一六二二―一六八五）は兵学者として山鹿流を唱え、のち赤穂浪士の吉良邸討ち入りの際、映画や芝居で大石良雄が打ち鳴らす山鹿流陣太鼓としてポピュラーな存在になった。しかし、素行の真価はむしろ思想家の側面にあって、中国直輸入の儒教をいわば和製儒教に練り直し、武士道的美学の形成に功があった。

素行が、その思想を幕府に嫌われ赤穂浅野家に配流されたとき、大石はまだ八歳で、素行が許されたときに一八歳。良雄の大伯父・大石良重と素行の親交から推して、素行に良雄が師事した蓋然性は高い。大石の討ち入りに至る筋の通し方、さらに幕末の長州藩で山鹿流を講じた吉田松陰の行動に、和製儒学としての素行の美学を感得できる。

美佐の母親・花子は、横浜の貿易商・牧野家に生まれた。この牧野家については八七年九月二九日付の新聞「ハワイ報知」が、同紙の創始者牧野金三郎の特集を組み、家系についてもかなりのスペースを割いている。明治の初期、英国マンチェスターから横浜に渡って貿易に従事したジョセフ・ヒギンボサムと、箱根二の平（現・彫刻の森）の農家の娘牧野キンが出逢い、譲、暎次郎、金三郎の三児を得た。一八七二（明治五）年生まれの次男・暎次郎は、英国商社ジャーデン・マジソン商会の番頭を経て、一九〇二年に亡父の名を取ったヒギンボサム・カンパニーを設立、「綿花雑穀輸入／海上保険仲立／株式仲買」を業務とし、横浜の小財閥と呼ばれた。

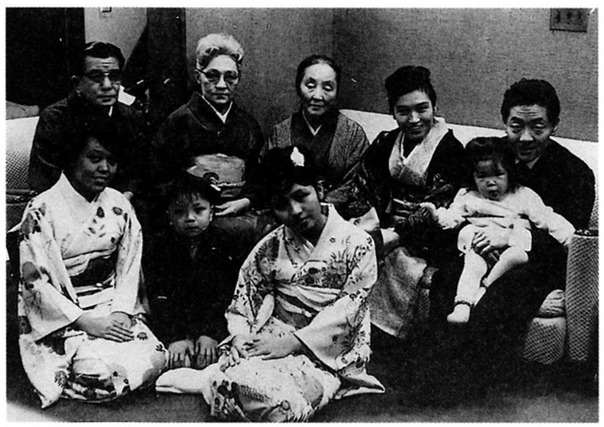
長男・譲は早くにハワイへ渡ってハワイ島カウ郡で商店を経営し、三男・金三郎も一八九九年にハワイへ居を移し、のちに邦字新聞「ハワイ報知」を刊行した。金三郎は新聞発行以外にも、耕地労働者の増給や待遇改善をめぐって、労働者側のすぐれた指導者として積極的に活動した。とくにオアフ島砂糖耕地における日本人労働者のストライキを擁護して四カ月間投獄されたことは有名だが、ほかにもハワイ日本人会の統一組織化に協力したり、ハワイの日本語教育合法化のため六年間にわたる合憲訴訟を展開し、ついに合衆国大審院から勝訴をかちとるなど、ハワイ移民社会の向上を目指して大きな業績を残している。

暎次郎は日英の混血児だが、妻に娶った年枝は日米の混血児だった。この暎次郎・年枝の長女が花子で、東洋英和に学び英語に磨きをかけた。

花子と結婚したとき（二七年五月）、アイデア・マンだった正雄は横浜で美術ケースの製造をはじめ、三越にこれを納入した。いちばん上の長男・幸一をすぐ亡くして、長女・美佐は男の子のように躾けられた。次女・美枝、三女・翠、四女・信（信子は通称で、曲直瀬姉妹の名に子の字はつけられていない）と続き、次男・陽造、三男・敏雄のあとに五女・道枝（現・マナセプロダクション社長）が生まれた。

美佐に行儀作法を仕込んだのは、父方の祖母・行義枝である。横浜フェリス女学院で外人女性宣教師の通訳をつとめ、宮城女学院で講師もやり、やがて牧師の山鹿旗之進と結婚した人で、筋金入りの教育者だった。盆に盛り上げた豆をひと粒ずつ、他の盆に箸で移し替える練習をさせられた。箸使いが作法の基本だと教えられた。

美佐は横浜の青木小学校からミッション系の捜真女学校に入学（四三年）。東京・横浜・川崎三市の水泳大会に、背泳種目で横浜代表者として出場している。四五年一月の



曲直瀬家両親（後列左端の二人）

「ハワイ報知」紙、牧野金三郎紹介記事

横浜空襲で曲直瀬家は焼失し（そのとき美佐は家にいて、振りかかる火の粉を避けるため、布団を頭からかぶって逃げまどった）、一家を挙げて宮城県登米郡登米町に疎開した。ここで約九カ月を過ごし、四六年に、美佐は仙台のやはりミッション・スクール宮城女学院の五年生に転入した。

晋と美佐が中学、女学校の時代、ともに水泳を得意としたのも偶然の一致だが、罹災後の疎開先も同じ宮城だった。晋が疎開したのは登米郡佐沼で（このあと前述の別府に移る）、東北本線瀬峰駅から現在はバス路線だけが通じている。佐沼は二五分、登米（終点）は四二分を所要する。二人の邂逅は戦後のことになるが、そうと知らず駅などですれ違ったことがなかったとはいえない。

さらに書き加えておくと、渡邊家、曲直瀬家、そして山鹿家の家業がモノの製造ではなく、もっぱら情報を操作することで成り立っていた点にも注目したい。銀行マン、医家、兵学ないし思想家という系譜は、ソフト生産そのものであって、曲直瀬正雄が戦後すぐ、美術ケースの製造を放棄したのも、資材不足の側面があったにせよ、先祖返りの衝動がより強く働いたのではないか。晋、美佐のこのような家系にも、やがて展開する渡辺プロのキャラクターが秘められているように思える。

渡辺プロダクション発足

終戦の翌年、曲直瀬一家が登米町から仙台に出たのは、母・花子が仙台駐留の米軍基地に通訳として採用されたからである。だが、仕事は通訳だけにとどまらなかった。基地内や、仙台市内のクラブなど娯楽施設に、芸能人を斡旋、調達する業務が待ち構えていた。かつて横浜に居住していたから、東京方面の芸能事情にも詳しいだろうと期待されたのだ。

曲直瀬家家族（戦時中、横浜で）

捜真女学校（校舎）

正雄は仙台と東京を往復する破目になり、両親はやがて仙台に、芸能人斡旋をビジネスとするオリエンタル芸能社を設立した。曲直瀬プロダクションの前身である。

戦争の終息と両親の多忙は、美佐の青春を開放的なものにした。宮城女学院では演劇部に入り、市内の映画館に通うことが多かった。『カサブランカ』の初公開に、多感な胸を締めつけられた世代のひとりだった。しかし、秋になると進学の準備にかからねばならない。祖母と父親は、曲直瀬の娘として美佐に医者の道を進んでほしかった。美佐は東京女子医大と日本女子大を受験した。コツコツと長時間勉学を重ねるというより、短期集中型だったから、結果にはあまり自信を持てなかった。

東京女子医大は予想どおり落ちたが、日本女子大には合格した。宮城女学院からは十数年ぶりの日本女子大入学者だった。仙台駅に帰り着くと、家族以外にも学校関係者が迎えにきており、祝福の言葉をおくってくれた。一九四八（昭和二三）年のことである。

以後の、美佐とジャズの関わりについては第一節で触れた。美佐が王子キャンプのプログラムを一任され、慶応の学生バンドを四つも抱えて手際よく切り回している手腕は、当然ながらプロの間でも注目された。

ちょうどそのとき、奇しくも晋がシックス・ジョーズを結成し、横浜の「ザンジバル」を拠点に活躍をはじめた。晋は東京進出を狙っていて、そのためには、自分以上にフットワークのきくマネージャーが必要だと考えていた。晋の情報網に美佐の評判が伝わってきた。きけば仙台のオリエンタル芸能社の曲直瀬社長の娘だという。ファイブ・ジョーズ&ア・ジェーンの時代、仙台へ仕事で行ったとき、母親の花子に会ったことがある。「あの人の娘さんか。親譲りの才能なんだな」と思った。晋は美佐に会って、単刀直入に切り出した。「ウチのマネージャーもやってくれないか」。

美佐は、女子大生と社会人の間を揺れていた。学生バンドの出演料はウィークデイで六

女子大時代の美佐（日劇前で）

○○○円、ウィークエンドで八○○○円だった。プロのバンドなら最低でも倍は取れる。晋は美佐に手数料として、出演料の一○%を支払うという。いままで両親からの仕送りが月に一万円弱。学生バンドを扱った手数料が、やはり月に五万円ぐらい。学生の身分としては言うこともなかったが、漠然と将来は平凡な主婦になるのだという常識も根強く生きていた。取りあえずシックス・ジョーズの仕事をウィークエンドに入れてみた。驚いたことにシックス・ジョーズを手掛けてから、仕事が段違いに面白くなった。なによりもプロとして仕事をしているという自覚に、熱いプライドがあった。

美佐がシックス・ジョーズにかかわったのは、横浜のザンジバルで人気を高め、銀座のクラブ「ハト」に進出してくる時期に重なる。松本英彦にはハトではじめて出会った。このハトの時代に、晋と美佐は日比谷公会堂でオール・スター・ジャズ・コンサートを主催し、五三年から「ロッカー・フォー」（新橋）や「マキシム」（日本橋）と仕事場をひろげてゆく。そのフットワークは、マネージャーというよりプロモーターに近く、晋が美佐を評価したのも、この点にあった。

美佐のユニークなマネージメントを高く評価したのは晋だけでなく、人気作家の三島由紀夫（一九二五―七〇）も刮目し、美佐をモデルにした長編小説『恋の都』を、五三年八月号から一年間にわたって「主婦之友」に連載している（五四年九月、新潮社から単行本刊行。七四年に編まれた三島由紀夫全集第八巻に収録）。シルバア・ビーチという六人編成のコンボ・ジャズをマネージメントする朝比奈まゆみが主人公で、ストーリーは三島のフィクションだが、まゆみの輪郭のくっきりした美貌と打てば響く聡明さは、美佐のファンをもって任じていた三島らしい描写である。

三島が美佐に紹介されたのは、開店間もない赤坂のナイトクラブ「ラテン・クォーター」でだった。美佐は出演しているフィリピン人歌手のビンボー・ダナオを聴きに行っていた。

シックス・ジョーズのマネージャー時代

クラブ「ハト」で

故人となった鹿島三枝子が二人を引き合わせてくれた。『恋の都』の連載開始はそれから半年と経っていないから、三島はよほど強いインパクトを受けたらしい。いまからみると、この小説は曲直瀬美佐時代のイメージを焼きつけたものとして貴重だが、そのひとつとして、仕事場や喫茶店など仲間の溜まり場を事務所がわりに使っていた光景があげられる。

当時は、貸事務所など稀少だったし、ワンルーム・マンションも出現していない。電話一本をひくことすら順番を待たねばならなかった。シックス・ジョーズの出演しているハトの楽屋控室や、その下の千疋屋、チョコレート・ショップなどで打ち合わせをし、連絡を取り合い、情報交換をし、企画を練るのである。そんなときの美佐の表情や仕草を、三島は温かい眼差しで見詰めている。

五二年以降、晋と美佐のコンビが、経営的にシックス・ジョーズをジャズの頂点に引っ張りあげたことは、前出の中村二大、八大兄弟の述懐にある通りである。その成功を踏まえて、晋が美佐にプロポーズしたのは五三年であった。晋は、日本のジャズ界は曲がり角にきていると見通しを語った。新しいビジネスの方向を考えない限り、日本のジャズは向上しない。「そのビジネスには君がぜひとも必要なんだ」。

「女性セブン」七五年二月一二日号によれば、このとき美佐はこう答えている。「その主義主張は結構よ。でも、それだけなら結婚しなくても、仕事の範囲に収まることでしょう」。

プロポーズされたとき、ついクールなセリフを吐くのは、日本女子大英文科の伝統みたいなものかもしれない。画家の梅原龍三郎に求婚された亀岡艶子が、「猫に可愛がられるよりも、ライオンに食べられたほうがいいわね」と、梅原を受け入れた話は有名だが、美佐の返事もかなりのものだった。

晋は以後、折あるごとにプロポーズを繰り返し、結局は美佐も「信頼できるパートナーになる」ことに同意する。晋が美佐に幾度となく語ったビジネスの構想を、一年後に晋は、

プロポーズの頃

山田通男に「組織化」という言葉に変えて説き、渡辺プロの基礎を固めていったのである。「結婚すれば、どちらが社長でもいいじゃないか」という晋の言葉が端的に物語っているように、晋・美佐の婚約と、渡辺プロの発足は不可分に結びついていた。植木等はいう。「晋さんは外見も柔和で無口な人だったけれど、内心は強気の男で、おまけに強運の男だった。その強運のはじまりが美佐さんとの出逢いだったと思う」。ミュージシャンの眼にも、二人のロマンスとプロダクションのスタートは切り離せないものだったようである。

五五年一月、渡辺プロダクション発足。社長・渡邊晋、副社長・曲直瀬美佐、専務・山田通男。ほかに女子事務員一名（関根富美子）を置いた。晋たちの〝理想の旗〟を掲げた砦は、日比谷・三信ビル地階にあったコンソール芸能社の一角に、机四つを持ち込んで事務所として使わせてもらった。はじめての事務所である。ちなみにコンソール芸能社（のちコンソール・オイル・カンパニー）は、米軍の千歳基地をテリトリーにし、吉田利雄社長は、かねて晋と懇意に付き合っていた。

晋は「組織化が必要だ」といったが、発足時の渡辺プロにはまだ組織はなく、あるのは晋と美佐が語り合ってきた夢への情熱だけだった。

同年三月、渡邊晋（二八歳）と曲直瀬美佐（二六歳）が結婚。

逆風のなかを

ジャズ・シーンに照らして見る限り、一九五五（昭和三〇）年の渡辺プロダクション発足は絶好のタイミングだとは言えなかった。五二年の平和条約発効後、ミュージシャンの生活に直結するジャズのパイは、確実に小さくなっていた。米軍施設の撤収のほかに、銀座の銀馬車が焼失したりしている。

結婚の頃

JATP来日（1953年）
（提供／小俣尚也）

マーケットを日本人に振り替えた直後こそ、ジャズ・ブームが巻き起こって、ノーマン・グランツに率いられたJATPや、ルイ・アームストロングの来日（ともに五三年）が、さらに追い風となったが、その翌五四年にはもうブームに翳りが出る。コンボの解散や再編成が相ついだものの、下降線を辿る傾向に変わりはなかった。

その下降する過程で、晋と美佐はミュージシャンの生活を安定させるためには、なにが必要かを考え、渡辺プロを発足させたのだから、アゲンストの風が吹いていたのは当然でもあった。スタート時の苦労は覚悟の上だったろう。もうひとつ、当初の苦しさを予想させる与件があった。それは所属ミュージシャンに対する「月給制」の採用である。

この時点で、渡辺プロダクションが実施した月給制は、晋や美佐の掲げた無謀な理想にすぎない。仕事がなくても生活費だけは保障するという、プロダクション側の抱えこんだ履行義務なのだ。ビジネスというよりボランティアに近い。

渡辺プロダクションが発足したとき、傘下に加わったミュージシャンは、渡邊晋とシックス・ジョーズ、河辺公一とオールスタージャイアンツ、小川洋子である。四月にハナ肇とキューバンキャッツ（一〇月にハナ肇とクレージー・キャッツと改名）が結成される。

美佐がマネージャーとしての手腕を認められたのは、シックス・ジョーズをウィーク・エンドの王子キャンプに入れ、一晩一万二〇〇〇円から一万五〇〇〇円のギャラを取ったところからはじまる。平日だと一万円から一万三〇〇〇円くらい。一カ月に四〇万円程度になる。渡辺プロダクションは中村八大、松本英彦らのスター・プレイヤーには、晋も含めて月給三万円を支払った。新人クラスは二万円前後からスタートする。シックス・ジョーズの場合で言えば、六人のメンバーに支払う月給は一六万円。差引き二四万円が残るわけだが、このなかから、バンドボーイの給与や移動費、そして事務所の経費を支出しなければならない（松本などビッグなプレイヤーには月給のほかに特別手当を支給した。その

白木クインテット
（提供／内田晃一）

河辺公一とオールスタージャイアンツ
（提供／小俣尚也）

合計が前出の「復帰時二〇万円の月給」になる）。

しかも、米軍キャンプのような条件のいい仕事だけが続くわけではない。世間のジャズ・ブームはあっけなく消え失せている。ハナ肇とキューバンキャッツの結成は、プロの運営に重くのしかかってきた。土曜日にクラブへ押し込むのがせいぜいで、平日のスケジュールはガラガラだったという。それでも給料は払うのである。リーダーのハナは二万五〇〇〇円くらいからスタートした。

渡辺プロダクション発足時を振り返って、美佐はいう。「会社は火の車で、月給日がくるのが怖かったですね」（「婦人公論」九三年一一月号『戦友・ハナ肇との四〇年プレイバック』）。

ミュージシャンの生活を安定させるための月給制で、スター・クラスの三万円は公務員平均給与の三倍に当たる。ハナ肇にしても公務員に比べるとはるかに恵まれている筈だったが、結果としては、次から次に月給の前借りをするミュージシャンが多かった。芸能人の金銭感覚は、一朝一夕に改まるものではなかった。美佐は、ハナを渡辺プロダクションのバンス（前借り）キングだった、と回想する。

美佐は、二〇〇万円程度の貯金をしていたが、それはあっという間にプロダクションの回転資金に化けてしまった。晋も似たようなものだった。晋の場合は、なかば伝説になっているポーカーの稼ぎまで、バンドのメンバーに持っていかれた。松宮庄一郎は、晋が渋い顔をしながら右のポケットから一万円、左のポケットから五〇〇〇円と、丸まったままの紙幣を取り出した情景を記憶している。

晋と美佐は、帝国ホテルで結婚披露パーティをしようと計画していた。ホテルに問い合わせたら三〇万円はかかるといわれた。ふたりは「もったいないね」とあっさり計画を放棄してしまう。世間的な形式にこだわる気持ちはなかった。その三〇万円も回転資金にま

平岡クインテット
（提供／内田晃一）

わった。これが直接に流れたわけではないだろうが、ハナ肇とキューバンキャッツの結成に要した費用が、奇しくも同額の三〇万円であった。

夫妻の貯金をはたいてしまうと、あとは資金繰りの苦労が待っていた。ハナが「バンス、バンス」と歌いながら、美佐のところにやってくる。「ここには、もう貸してあげるお金はないわよ」と、美佐が強く言うと、「じゃ、ママさんのところに行こう」。

「ママさんというのは、私（美佐）の母親のことです。当時、母は〝曲直瀬プロ〟という芸能プロダクションを、父親とやっていたんです。それで主人（晋）と私とハナちゃんと三人で、曲直瀬の家まで行くんです。私の両親もお客様が好きだから、ハナちゃんを歓迎する。ハナちゃんはそこで、面白いお話をたくさんするわけです。すっかり座が和んで、いい加減に時間も経った頃、〝実は……〟とお金のことを切り出すんです」（前出「婦人公論」）。

曲直瀬から借りただけではない。仕事先からも借りた。ミュージシャンのバンスのために、会社がバンスを重ねていたともいえる。美佐はガードを堅くして耳を貸さないようにすると、晋のところへ行く。「おい、忘れるなよ。給料から差し引くからな」といいながら、晋は差し引くのはよく忘れた。挙句、切羽つまって事務員から一〇〇〇円借り、夫婦で折半してそれぞれ仕事場に駆けつけたこともある。

そのなかで渡辺プロダクションは、五六年に与田輝雄とシックス・レモンズ、翌五七年には白木秀雄クインテット、平岡精二クインテット、寺本圭一とスウィングウェスト（のち寺本圭一とカントリージェントルマン）、中村八大モダン・トリオ、宮川脇三とフォア・ウィングス、レッド・コースターズ、アイビー・ファイブ、伊藤素道とリリオ・リズム・エァーズ、そしてジョージ川口、笈田敏夫、中島潤、宇治かほる、MCの津村ひさし、とそれぞれ契約した。

与田輝雄とシックス・レモンズの場合、京橋のリッツというクラブにレギュラーで出演していたが、ここにシックス・ジョーズの出演がきまった。「よりによってシックス・ジョーズとは……」と与田たちは観念した。渡辺プロダクションのシャープな仕事（マネージメント）ぶりは、すでにジャズメンのひろく知るところとなっていた。

しかし、渡辺プロダクションはリッツの仕事を独占しようとはしなかった。バンドをグループにプールしよう。仕事場も同様にプールして、バンドをぐるぐる回してゆけばいいではないか。それが晋と美佐の考えだった。そしてシックス・レモンズは契約に応じたのである。ジャズメンとの約束は必ず守る。貧しいなりに二人の貫き通した意地と誠意が、ようやく評価されはじめたのだ。

京橋のリッツに出演する以前、シックス・ジョーズとシックス・レモンズは銀馬車で競演していた時代がある。そのとき、秋吉敏子がシックス・レモンズのピアニストで、コンボに関心を持ちはじめていた。秋吉はすでに仙台の曲直瀬家で美佐を見知っていたが、晋とはこのときが初対面だった。晋は秋吉のリアル・ジャズへの興味に理解を示し、清水潤（ドラムス）に相談してみたらと、アドバイスした。

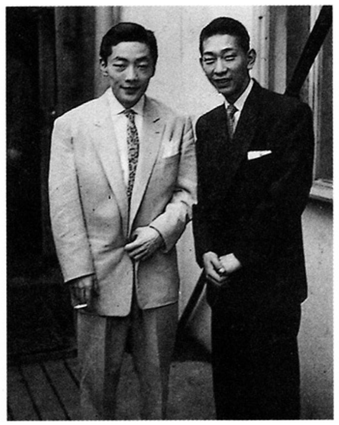
秋吉は五二年にその清水たちとコージー・カルテットを結成したが、一カ月でギブアップした。その苦しい時代の秋吉を、晋と美佐は陰に陽にバックアップした。中村八大がシックス・ジョーズを出て、レニー・パブロとかわったとき、軍務のあるレニーのピンチヒッターとして、晋はしばしば秋吉を起用した。エキストラは一ステージ五〇〇〇円の相場だったが、「晋さんは九〇〇〇円くれた」と秋吉は回顧する。

銀座六丁目・テネシーの夜の呼び物がシックス・ジョーズだったとき、晋が「アキちゃ

伊藤素道とリリオ・リズム・エァーズ
（提供／シンコー・ミュージック）

与田輝雄とシックス・レモンズ
（提供／内田晃一）

秋吉敏子（現在）


晋と笈田敏夫（1955年頃）

ジョージ川口
（提供／内田晃一）

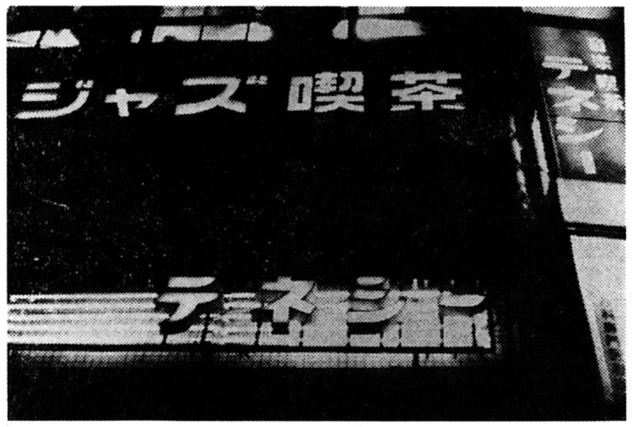
ん、テネシーで昼に演奏したら」と勧めた。五三年一一月、ＪＡＴＰの一員として来日していたオスカー・ピーターソンが、そのテネシーを訪れ、秋吉の才能に着目、これがきっかけとなって彼女のバークリー音楽院留学が実現するのである。

アメリカのジャズ界で絶賛を拍した秋吉は、六一年春、六年ぶりに帰国して渡辺プロダクションの快進撃を知ることになる。六五年に再渡米して、七〇年にこんどは美佐のプロデュースにより、『万国博ジャズ祭』のために来日するが、それについては後述する。

後年、井原高忠（元・日本テレビ・プロデューサー）は言っている。「今日は立川のオフィサーズ・クラブへ行って、いくらもらったから、頭割りで金わけて、っていうのが、当時の楽隊の姿だった。それを、白木秀雄は月給いくら、とか、松本英彦はいくら、という風に合理的にしたのは、晋さんの新しいやり方だった」（文藝春秋社『元祖テレビ屋大奮戦』）。

繰り返すが、晋はジャズが五四年頃から下火になって、失業するジャズメンが出はじめたのをみて、「ようし、おれがマネージャー業をやって、ジャズの火を燃えつづけさせよう」（「時の動き」八七年二月一五日号）と決心したのだった。まずジャズメンが生活できること。そのための月給制だった。月給制を維持するには、多くの仕事場を確保し、多くのバンドを擁して、目先を変えたローテーションを組む必要があった。それはすでに、マネージャーの領域からプロデュースへと一歩踏み出していた。

晋と美佐は、回転資金の工面に追われながら、毎日のようにいろんな溜まり場で、いろんなミュージシャンと語り合い、夢を追い求めていた。



テネシー